

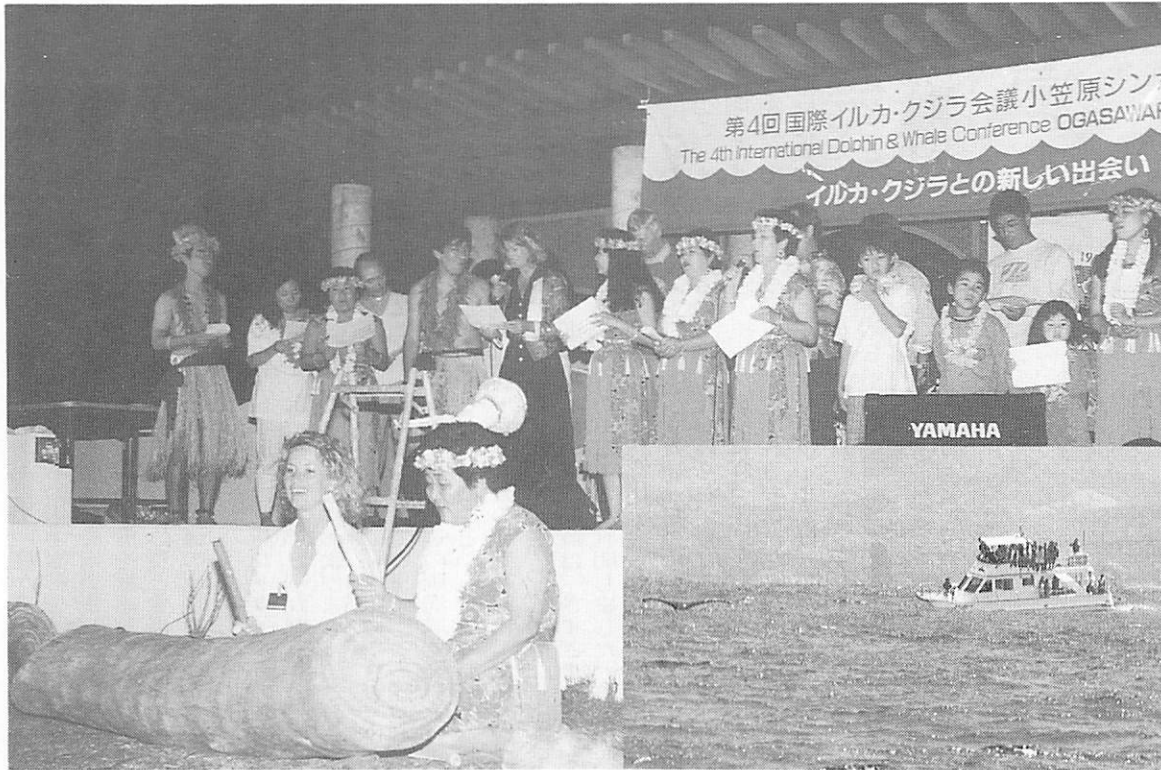


Megaptera

発行；小笠原ホエールウォッチング協会
(OWA)

東京都小笠原村父島字西町
04998-2-3215
04998-2-3500(FAX)

メガプテラ=ギリシャ語で「大きなヒレ」



特集号 第四回国際イルカ・クジラ会議 小笠原シンポジウム開かれる！

イルカ・クジラとの新しい出会いをテーマに「第四回国際イルカ・クジラ会議」小笠原シンポジウムが、四月十五日より十七日まで開催されました。この会議は二年に一度開催され、これまでオーストラリアやハワイで行われてきました。今回は日本が開催地となり、小笠原の他にも江の島（四月八日・十日）と大阪（四月二十五日）でそれぞれフォーラムが開かれました。

四月十五日、おがさわら丸で島外からの参加者一行が到着。二見港にあるクジラのモニュメント前にて歓迎式が催され、世界各国から集まったプレゼンターにレイが贈呈されて、シンポジウムの幕開けとなりました。

この後、早速小笠原のザトウクジラを見てもらおうと、陸上からの観察会が実施されました。新設させた「三日月山展望台」に、二十八時間の船旅の疲れをもとめせずたくさんの参加者が集まってくれました。その気持ちに通じたのか、肉眼でもはっきりと見える近さに親子連れなど数ポッドのクジラが姿を現わしてくれました。プロローが上がり、背中が見えたりする度に、歓声があがり、クジラの解説をするスタッフの声がかき消されてしまう程でした。

その晩から始められた小笠原シンポジウムに集まった参加者は来島者、村民合わせて約四百人。初日はまず地元クジラやイルカを知ってもらおうと、小笠原をフィールドとしている研究者二名とカメラマンによる講演が行われました。翌十六日には海外からのプレゼンター四氏により、鯨類の生態やイルカとのコミュニケーションの試みなど、様々な内容の講演がスライドやビデオを交えて行われました。日本

語、英語が飛びかう会場で、小笠原では初めて導入した同時通訳システムが大活躍しました。最終日には「イルカ・クジラと人間の共生を考える」と題したパネル・ディスカッションが行われ、活発に意見が交換されました。

この会議の期間中、好天に恵まれ、参加者はフリータイムを利用してダイビングやシーカヤックなど、小笠原の自然を楽しむことができた様です。

OWAでも陸上からだけでなく、大海を泳ぐクジラを同じ海の上から見てもらおうと、ボートによるホエールウォッチングを実施しました。参加者の期待の大きさに、もしクジラが見つからなかったらと心配しましたが、陸上観察会に引き続きクジラに恵まれたホエールウォッチングとなりました。

二日間延べ約二百七十名が参加し、迫力あるクジラの勇姿を満喫することができた様子に、関係者もほっと胸を撫でおろしました。

十七日の最終日の夜には、さよならパーティーがお祭り広場で行われました。星空の下、かがり火が焚かれ、ステージでは来島した「風の楽団」や地元バンドらの演奏が行われ、会場の雰囲気盛り立てました。プレゼンターへの周りには人垣ができ、また期間中見知った仲間同士で、イルカやクジラをキーワードに語り合い、盛り上がる人達もいました。最後に、プレゼンターがステージ上に揃い、小笠原の歌「レモン林」を皆で合唱し、再会を約束して三日間のシンポジウムは閉幕しました。

本号では、国際イルカ・クジラ会議特集号として、各プレゼンターの講演内容を次頁から紹介します。